

ジモト で はたらく

福島県版

平成30年3月発行



 復興庁

Reconstruction Agency

新たなステージ 復興・創生へ

地元就職のススメ

地元就職するか地元以外で就職するか。

それは就職を考える時に頭を悩ませることの一つ。

実は地元には、あまりよく知られていないものの、

地元ならではの魅力的な企業がまだまだたくさんある。

そんな地元企業に就職し、実際に働いている先輩たちの

日々の仕事の様子や地元で働く魅力を紹介。

「地元就職」について考えてほしい。



地元就職のススメ	2
真面目に頑張っていると、 必ず成果が現れます	4
及川 和彦さん 株式会社伴助 製造担当 2017年入社	
自分が提案したタルトが 全国のショップに並んでうれしい	8
渡邊 勇輝さん 株式会社青木商店 製造担当 2012年入社	
お客様の「ありがとう」。 その一言が、明日の力になる	12
稲月 祐樹さん 株式会社ダイユーエイト 店長 2005年入社	
Interview	
地元の良さを知ろう	16
服部 正幸さん 福島大学 ふくしま未来食・農教育プログラム プロジェクト研究員	
都会と地方の違い	20
吉田 浩 東北大学大学院 経済学研究科 教授	
被災3県の高校生・大学生の就職に関するアンケート 数字で見る3県の特徴	21
地元企業に目を向けよう	23





焼魚部門の商品の中で一番人気があるアブラガレイ。

真面目に頑張っていると、 必ず成果が現れます



おいかわ かずひこ
及川 和彦さん

株式会社伴助
製造担当 2017年入社
いわき市出身 18歳

長年培った技術で製造した 高級干物を全国へ届ける

株式会社伴助は、創業60年を超える干物専門の水産加工会社だ。人気のシマホッケをはじめ、サバ、キンキ、赤魚等、良質な魚だけを世界中から買付け、半世紀以上に渡り磨いてきたカット・味付け・乾燥等の

加工技術で干物へと仕上げる。特に上等な商品には社名の焼印を押し、帯を着せて「世界中にたった一枚」の高級ブランド干物へ。そして、築地をはじめとする全国の中央卸売市場や、スーパー、料亭、旅館、居酒屋へ出荷する。その量は、ホッケだけで年間約3千トン。日本のホッケ輸入量の約10%を占めている

という。

本工場は福島県いわき市に構えるが、東日本大震災以降、西日本の販売強化を目的に愛知県小牧市に東海工場を設立。さらに2016年には、東京都銀座に実店舗「銀座伴助」をオープンした。物販では、銀座にふさわしい華やかな高級干物を陳列。レストランでは、気軽なランチから豪華なコース料理を提供する。

手元の絶妙な加減で やわらかい切り身を扱う

高校卒業後、2017年4月に入社した及川和彦さんは、いわき市の本社工場の焼魚部門に所属して



高級干物が並ぶ銀座伴助の店内。

る。焼魚部門は13年に稼働した新たな部門で、干物に仕上がった切り身をオーブンで焼き上げて電子レンジ対応のバックに詰め、スーパー等で惣菜として販売する商品を製造している。

焼魚部門の工場に入ると、約15人のスタッフが熱心に作業を行っている。そこで及川さんが担当していたのは、オーブンで焼き上げたアブラガレイの切り身をバックに移し替える作業だ。オーブンから出てきた天板の上には、良い色に焼き上がった切り身がびっしりと並んでいる。及川さんはそれを一つ一つ丁寧にすく



業務用オープンに入れて焼く切り身を天板にのせる。

い上げ、テンボ良くバックに並べていく。

「魚の身は柔らかかく崩れやすいので、面手でしっかりと押さえてバックに移すのがポイントです」。バックには切り身を一枚ずつ乗せるので、天板の上の切り身はあつという間になくなっていく。及川さんは次々と焼き上がった切り身を天板ごと運び、バックに移し替えていた。

天板にのせる作業から

最終の箱詰め作業まで、

焼魚部門の全工程をまかなう

及川さんは、焼魚部門のその他の製造工程も担当する。たとえば、オープンの天板に焼く前の切り身をのせる作業、完成したバックの商品をカゴに詰める作業、出荷前の箱詰め作業などだ。

今はまだ入社1年目だが、ゆくゆくは焼魚部門のプロフェッショナルになるため、今担当する作業をもっと手際良く、もっと正確に行い、「この会社で長く働くことを目指して1日1日を積み重ねていきたい」と話した。



及川さんのある日の一日

7:55

朝礼
1日の作業スケジュールや製造する数を確認する。

8:00

作業開始（午前）
午前中は、主にバック詰めした焼魚を箱に詰める作業を担当する。

11:30

昼食

12:10

作業開始（午後）
オーブンで焼く前の魚を天板に並べたり、焼き上げた魚をバック詰めしたりする作業を行う。

14:30

休憩

14:50

作業再開
バック詰めの後にはラップで包装され、シール貼付された完成品をカゴに並べる作業を行う。

17:00

終業
残業は少なく、定時退社で自宅へ帰る。

上司に聞く

じっくり育てる環境の中で
のびのびと成長しています

及川君は、就職試験で面接を担当した時の第一印象通り、仕事でも私語などはなく熱心に作業に取り組んでくれています。仕事の面ではとても真面目ですが、オフでカラオケに行ったときに、みんなの前で歌を披露するなど積極的な一面もありました。焼魚部門内ではメンバー全員から、とてもかわいがられている存在です。

当社は今、社内体制を強化するために、若年層を長期的に育成し、組織の若返りを図ることを実践しています。2017年度には新卒で4人を採用しましたが、今後も定期的な新卒採用を続けていく予定です。

「長い目で若手を育てる」という方針のもと、新人は入社後3〜5年かけてじっくり育てることになっています。これから入社を希望する方も、及川君のようにのびのびと働いてほしいと思います。



総務 島山 知さん

福島県で はたらく魅力



焼きあがった切り身を丁寧な手つきでバックに詰める。

慣れない作業に奮闘する姿を 全スタッフが見守ってくれた

手作業が多い工程のため、多くのスタッフが同時進行で作業を行い、1日5千から8千バックを製造するという焼魚部門の仕事。

今はすっかり仕事に慣れた及川さんだが、入社直後は「はじめて体験することはかりで、ミスが多かった」と話す。

例えば、焼魚部門では10種類以上の魚を対象に作業を行うが、箱詰め作業を行う時、魚の種類を間違えて詰めてしまうことがよくあった。また、ラベルを貼る位置を間違え、もう一度やり直しとなってしまうこともあった。しかし、その都度先輩方が優しく教えてくれたという。このように同社では、若手を長期的に育成し長く働いてもらうために、丁寧に粘り強い指導を心掛けている。

2017年、焼魚部門には及川さんを含め新入社員が2人配属されたが、先輩社員からベテランのパートナーまで、社員全員が新入社員をあたたく見守り、彼らのミスは全員でカバーしながら育てていった。

そのおかげで、及川さんも仕事に慣れると同時にミスも減っていったという。一度のミスだけでその人を判断したりしない、そんな懐の深い社風が、社員が会社に着するきつかけを作っている。

魚を加工してみたい 夢を抱いて地元企業に入社

及川さんが同社に入社するきっかけは、高校時代に就職活動を始めにあたり、自然な流れで地元いわきを拠点に働こうと決めたことだったという。

「いわきにずっといたいと思ったので、仕事も地元で選びました。いわきは静かなところが好きです」と、生まれ育った街の住み心地の良さをあらためて感じている。

高校3年になって就職活動をはじめた及川さんは、求人票をチェックして、市内にあるさまざまな企業を調べた。そのうちのひとつが、同社だったのだ。

もともと及川さんは魚が大好きだったため、干物の製造に興味があった。職場見学に行き、生魚を味付

及川さんの オフショット

自転車に乗って 市内の温泉地へ

及川さんは自宅からの出勤に自転車を活用しているが、休日も好んで自転車に乗っているという。愛用している自転車は電動自転車のため、「少々長い距離や荒天の時も快適に乗ることができる」と話す。

休日、時間がある時はいわき市内の自転車巡りを楽しむこともある。一番の思い出は、市内の温泉地に自転車で行ったこと。片道1時間をかけて出かけた温泉に浸かり、仕事の疲れをリフレッシュ。

市内にさまざまな温泉地があるいわき市ならではの休日の過ごし方だ。





ラップ包装したパックを確認してカゴに詰める。

けして乾燥させる干物製造工程を見た時、「自分もやってみたい」と感じたという。

就職試験では、遅刻や欠席をせず学校生活を送ってきたこと、そして仕事に就いても休まず熱心に作業できることをアピールした。同社は及川さんの物事に取り組み真面目な姿勢を評価し、採用を決めた。

有言実行の及川さんは入社後1日も欠勤せず、ひたむきに作業に取り組んでいる。

後輩へのアドバイス

入社してまもなく丸1年。最初はミスもありましたが、先輩方が優しくフォローしてくれたので安心して仕事に取り組むことができました。今は間違いもなくなり、入社前よりも「ちゃんと仕事をしなくては」という意識が強くなっています。

この会社では、今後も若手の人材を採用して、じっくり育てていきたいと考えているそうです。これから入社してくる方にも、きっと優しく丁寧に指導してくれると思います。

僕も、真面目に一生懸命働いてくれる後輩と早く一緒に仕事がしたいと思っています。



**責任ある仕事に挑戦中
一歩ずつ成長を遂げていく**

今、及川さんは焼魚部門の仕事である課題を持っている。それは、通称「カルテ」と呼ばれる作業指示書に関する業務だ。50社以上の顧客先、また1社あたり10〜50種もあるカルテの原本から当日作業で使用するものを選んでコピーし、製造数量、製造時間、使用シールの現物の貼付を

担当している。「間違ったカルテを作れば、間違った商品を作ってしまうことになるので、一番神経を使う仕事です。少しでも早く、正確に作業ができるように頑張っています。」



企業情報 株式会社伴助

所在地 福島県いわき市泉町3-13-2
TEL: 0246-56-6377
<http://bansuke.jp/>

代表取締役 小野 喜尚
資本金 1,350万円
設立 1953年7月
従業員数 75人 (2018年1月現在)
事業内容 水産加工食品製造





1日平均300台のタルトを製造する。

自分が提案したタルトが 全国のショップに並んでうれしい

タルトのトッピング&カット 責任あるパートを担当

「ホールのフルーツタルトをカットする時のポイントは、タルトの上にとっさり乗ったフルーツを崩さず、いかにきれいに切るかということ。基本的には勢いによってカットしますが、フルーツの種類やその日

の仕上がり具合で切りやすさが変わってくるので、1台1台切り方を見極めてカットすることが大切なのです」。

「フルーツ文化創造企業」として果物店、フルーツジュース専門店、フルーツタルト専門店等を展開する株式会社青木商店。そのタルト製造拠点となる本宮工場に勤める渡邊勇



わたなべ ゆうき
渡邊 勇輝さん

株式会社青木商店
製造担当 2012年入社
郡山市出身 24歳

輝さんは、現在フルーツタルトのトッピングとカットの工程でチーフ職を担っている。持ち前の頑張りでも高い技術を習得し、ベテランでも難しいといわれるカット作業など責任のあるパートを任されているという。

**ケーキ製造初心者から急成長
チーフとして工程を管理する**

2012年に入社して製造部に所属した渡邊さんは、最初の1年目は基本的な技術を身につけるためにカスタードクリームを炊く工程を任せられた。

その後、工場では製造するタルト、キッシュ、シフォンケーキ、焼き菓子、ゼリー等の全工程を一通り経験。スイーツが大好きで、趣味でケーキを作っていたというが、本格的な技術を学んだのは入社してから。最初は技術が追いつかず多くの失敗を経験したが、それ以上に練習を重ね、先輩から指導等のサポートを受けて少しずつ技術を身につけた。

現在のチーフ職では、タルトの製造はもちろん、製造全体の管理も大切な仕事として加わる。

「タルト製造は生地作り、フルーツのカット、トッピング等の工程がありますが、チーフは製造全体の流れを把握し、その日製造する全量を時間通りに仕上げられるよう各スタッフに指示を出さなければなりません。時間のロスがないように前後の進捗よくを確認しつつ、先を予測しながら指示を出すのがラインを止めないコツですね。」

自分のアイデアが形に！

若手ながら新商品開発に抜擢 新しい能力が開く

さらに渡邊さんには、もう一つ大



開発ノートに新商品のデッサン等を細かく記載。

切な仕事がある。それは新商品の開発だ。入社直後から「こんなタルトを作ってみよう」という開発への熱意があり、その思いが上司に伝わり、入社3年目から開発に携わることになったという。

新品種のブランド「イチゴ」を使ったタルトや、デザインやトッピングに工夫を施したおしゃれなタルトなど、すでに数えきれない数のアイデアが採用され、新商品として形になった。

「自分から提案した新商品が採用されてお店に並ぶのが、一番のやりがいです。この会社は、社員の『やってみよう！』という意欲的な気持ちを含んでくれるので、若手でも商品開発等の仕事にどんどん挑戦することができると大きな魅力だと思います。」

日頃から開発ノートにアイデアを書き貯めている渡邊さん。頭の中にある想像のタルトを形にするために、原価と売価のバランス、製造オペレーション、消費者に受け入れられる見た目や味も考慮しながら、新たな商品の誕生に向けて試行錯誤を続けていく。



渡邊さんの ある日の一日

9:00

作業確認、朝礼

一日の作業スケジュールを組み立て、朝礼で生産台数、終了予定時間等を全員に伝える。

9:30

作業開始

10:00

新商品開発会議

工場社員とシヨップマネージャーが集まり、毎月2〜3品の季節商品・新商品を開発。

13:00

昼礼、昼食

13時出勤のスタッフに連絡事項を伝えてから昼休み。

14:15

作業再開

各店舗からその日の売上に伴う発注追加等の連絡が入り、製造数の微調整を行う。

16:00

製造数の確認

出荷第一便に向けて製造した台数を確認する。

18:00

終業

午後出勤のスタッフに残りの作業を引き継ぎ、発注伝票等の事務処理を行ってから退社。

上司に聞く

「スイーツ男子」の さらなる成長に期待

入社当初から、渡邊君はケーキを作る・見る・食べるのが大好きな「スイーツ男子」でした。最初は製造技術が高いとは言えませんが、周田の指導を受けてどんどん上手になっていきましたね。

入社直後から新商品開発に携わりたいという熱意を感じていて、社内でも商品開発の体制を確立するタイミングで彼を誘い、開発の手順や会議の組み立て等も一緒に構築していききました。商品開発も一生懸命ですし、社内の管理システムや工場のおペレーションについても改善策を提案するなど、よく考えてくれていると感じます。

彼の頭の中には、やりたいことがいっぱいあります。今後はそうした考えを分かりやすく伝え、工場内で彼を中心としたチームワークがさらに強まっていくことに期待しています。



工場長
菅野 雅子 さん

福島県で はたらく魅力



オープンで焼き上がったタルト生地。

高校卒業後は、地元企業で 大好きなケーキ作りを仕事に！

商業高校に在学中は、会計科で簿記や財務の勉強をしていたという渡邊さん。クラスメイトの半分は進学、半分は銀行や官公庁等に就職という環境の中で、渡邊さんは「地元企業に就職して、自分の好きなケーキ作りを仕事にしたい」と考えていた。

就職活動が始まると、学校に掲示されていた同社の求人票を発見。シヨップが郡山市内に数カ所あり、渡邊さんも「フルーツピークス」同社が運営するフルーツタルト専門店」のタルトが大好きだった。さらに調べてみると、同社は渡邊さんの地元である郡山市に本社があり、フルーツ関連の事業者としては全国にシヨップを構える大手企業であることが分かり、さらに大きな魅力を感じたという。

「就職を意識して、夏休み期間に青木商店の職場見学に行くことになりました。そこではシヨップ、工場事務所等いろいろな場所を見せてもらうことができました。特に製造工場の見学では、実際に働く人の作業

風景を見ることで自分が働く姿を具体的にイメージすることができ、入社への意志が固まりました」。

オンもオフも満たされる 福島のおもしろさを実感

渡邊さんが就職活動を始める少し前、高校2年の春休みに東日本大震災が発生。日常生活に変化はあったが、渡邊さんがもともと思っていた「地元で就職する」という気持ちは揺るがなかった。

「高校を卒業したら地元で働く、というのは自分にとって自然な流れでした。僕は郡山に良いところがあると思っていて、それはアクセスの良さなんです」と話す。

「僕は自然が大好きで、旅行も好きなんですけれど、ちよつと移動すればは会津・磐梯エリアの雄大な自然を感じに行けるし、那須や日光といった観光名所も近い。ここは仕事もプライベートも充実した毎日を送れる環境だと思います」。以前、転勤で埼玉県川口市に1年半住んでいた経験があり、その時に地元・郡山の良さをあらためて感じたという。

渡邊さんの オフシヨット

福島の大自然を アクティブに楽しむ！

自然が大好きで、特に猪苗代湖と磐梯山を両方望める景色がお気に入りという渡邊さん。休日は1〜2カ月に1回の頻度で猪苗代湖方面にドライブに行き、お気に入りのカフェで過ごしてリフレッシュをしているという。

時には景色を見るだけでなく磐梯山や尾瀬に入り、トレッキングで大自然を満喫することも。夏は福島市の摺上川で川遊び、冬は磐梯エリアの雪山でスノーボードと、1年を通して福島の大自然を体いっぱい感じて、充実したプライベートを過ごしている。



ベテランの先輩を目標に、
フルーツとタルト作りの
プロフェッショナルを目指す

現在チーフ職として着実にキャリアを伸ばしている渡邊さんは、今後
もより一層頑張っていきたいという
目標がある。

それは、製造技術のさらなる向上
と、同社の事業の基本であるフルー
ツの知識を高めていくこと。工場では
フルーツの発注業務もあり、タル
トに使える熟度を見極めたり鮮度を



イチゴを手際よくカットする。

後輩へのアドバイス

製造の仕事は技術が伴うので、「自分はお菓子が作れるか心配」という方もいるかもしれません。でも、僕も入社するまで専門的な勉強をしてこなかったし、工場にもそういう方はたくさんいます。「おいしいお菓子を作りたい!」という気持ちがあれば、入社してからどんどん技術を習得することができると思います。

また、この会社は意欲があれば新しいことにチャレンジできるので、自分の夢をかなえられる場所だと思います。

ピンチのときも、チームワークで乗り切れるような方と一緒に働きたいですね。



管理したりという経験も積んできた。フルーツを見極める目を養ってきたが、分からないことも多くまだまだ勉強中だという。そんな時は、会社で運営するフルーツショップに在籍するベテランのフルーツマイスターに連絡し、不明点を相談すること。身近にいるスペシャリストに力を借りながら、自らも製造とフルーツのプロフェッショナルを目指し、これからも努力を続けていく。



企業情報

株式会社青木商店

所在地 福島県郡山市八山田5-405 (本社)
TEL: 0243-36-1877 (本宮本部)
<http://aoki-group.com/>

代表取締役 青木大輔
資本金 4,500万円
設立 1924年5月
従業員数 2,270人 (2017年2月現在)
事業内容 フルーツショップ事業、フルーツパー事業、
フルーツタルト&カフェ事業





巡回しながらスタッフの意見を聞く稲月さん。



お客様の「ありがとう」。
その一言が、明日の力になる。

自分らしく仕事をするために 経験も生かせる接客業の道

「話することが好きで、接客業に興味があった」という稲月祐樹さん。実は工業高校の出身だ。ホームセンター「ダイユーエイト」は、実家の近所にもあり、たびたびお客として訪れていた。レジ担

当者や、商品整理を手掛けるスタッフの姿を身近に感じたという。ある日、お客様が購入した木材を、機械を使って一緒にカットするスタッフを見かけた。「面白そう！こんな接客サービスの形もあるんだ」と仕事内容に心ひかれたという。「ここなら、人と関わりを持ちながら、高校で学んだこ

いなつき ゆうぎ 稲月 祐樹さん

株式会社ダイユーエイト
店長 2005年入社
伊達市出身 30歳

とも活用できるのでは」。そんな思いが、株式会社ダイユーエイト入社の日、胸膨らませ入社した当時について、「ホームセンターの従業員は、いかに深い商品知識を持っているかが重要でした。お客様へ商品の使い方や選び方を、明確にアドバイスできなければならない。新人の自分には、その知識が不足していた」と振り返る。

専門知識の磨き上げに 年齢も肩書きも垣根はない

「次々と進化を遂げ、便利になっていく商品の数々は、覚えなければならぬことも多く、必要なら自ら購入して使ってみることもありました。花の苗の栽培法を確認するため、自宅の庭に植えたこともあった」と話す。

メーカーの講師派遣で開催される社内研修会には、積極的に参加してきた。不明な点は徹底して調べる姿勢を持ち、コツコツと商品知識を増やしてきた稲月さん。時には、接客を通じて、「お客様から教えていた

だくこともあった」と話す。

「接客の中で『このサイズとこのサイズの間が欲しい』という注文があれば、売り場に反映することがあります。お客様は購入したい商品を熟知して店を訪れる方々もいれば、作りたいものがあったりも何が必要かさ分からぬ方もいる。お客様がスタッフに求めるのは、アドバイザーとしての専門的知識です」。

細やかなコミュニケーションは暖かな店の雰囲気を作り出す

18歳で入社後、福島県内や県外の



在庫管理、人材管理、発注から仕入れなど、数字と向き合う時間だ。

店舗で、販売経験を積み上げた。その行動力と実績が評価され、26歳の若さで山形県尾花沢店の店長に抜擢された。現在勤めている仙台茂庭店は店長として3店舗目の赴任だ。

「新人店長の頃は、店長としてお客様に認めていただくことに力を注ぎました。若い店長に対して、お客様が不安を抱かないように努力しました」。

店長の仕事について、「以前は、自分の仕事を積極的にこなすことが目標だった。結果が悪ければ、原因を突き止め、自分が修正を掛ければ良かった。しかし、管理職自らが動いてしまったら部下は育たない」と思うようになった稲月さん。スタッフ一人一人の考える場を作り、自ら行動する力を培うために日々試行錯誤している。

失敗の原因を一緒に検証し、改善への道を共に探る。これが稲月さん流の店長術。こうした地道なコミュニケーションの積み重ねによって、スタッフや店全体の明るい雰囲気がもつなげられた。



稲月さんのある日の一日

9:00

朝礼

朝礼は1日3回、シフトの出勤時間毎に行われる。この日稲月さんは店長として2回参加した。

9:30

店舗の巡回

店内はもちろん、倉庫から店舗外周まで、くまなくチェック。

10:00

事務作業

在庫確認、商品発注、納品スケジュール確認など、細心の注意を要する作業だ。

12:00

昼食

13:00

売り場の巡回

商品の陳列状況確認や従業員への指示・確認、お客様へのあいさつと、自配り気配りに余念がない。

15:00

現状確認・翌日の計画

指示内容の進捗よくの確認やシフトのチェックなど、店長としての仕事を次々とこなす。

18:30

終業

上司に聞く

20代から店長を任されている若手のホープ

稲月君は、入社当時から行動力、同期社員の中でも群を抜いていた。担当する地域の調査や商品の勉強、店内での接客など、手間がかかる事にも臆せず丁寧に対応しています。弊社のホームセンター事業部に所属する店舗と関連企業各店舗に配属される店長は、ほとんどが30歳代から40歳代。稲月君は20代から店長に抜擢された若手のホープです。

積み重ねた経験だけでは生まれないう斬新なアイデアと、実現するための嗅覚や行動力を持ち合わせていると思います。

新店舗の印象は、オープンを担当する店長の手腕と持ち味が影響します。稲月君は、自分で考え動く姿を見せ、従業員を動かせる能力に長けている貴重な存在。管理職としての天性の才能を持ち合わせていると期待しています。



第6地区長
清野 志信 さん

福島県で はたらく魅力



お客様への迅速な対応は、顧客満足度に直結するという。

仕事を通して気付く 素晴らしい故郷、福島の魅力

稲月さんは、これまでの転勤経験から、地元福島県について多くのことを学んだと話す。

「福島県は、沿岸の『浜通り』、内陸の『中通り』、山沿いの『会津』と、3つに区分されています。偶然にも、この3地域の店舗全てに配属されたことで、生まれ育った福島県を再認識することができました。同じ県内なのに、地域によって文化や生活環境が大きく異なることに驚かされましたね」。

稲月さんの出身地は、中通りに位置する伊達市。内陸部にあたる地域だ。広い福島県は沿岸部と山沿いでは気候風土が全く異なる。

幼い頃から内陸に暮らし、海に親しむ機会や山を訪れることは少なかった。しかし社会人になり、いわき市内に配属した頃は海を満喫。会津の暮らしては山を存分に楽しんだと、笑顔を見せる。

「育った内陸部の寒暖の差は、おいしい果物や野菜を育ててくれます。だからお酒も美味しい。そして、

地域の郷土料理やレクリエーションは、四季折々の楽しみ方があります。冬はスキーやスノーボード、夏は海水浴や森林浴。仕事からちよっと離れて、リフレッシュするには事欠きません」と、仕事だけでなくプライベートでも、一年を通し充実した毎日を送っている様子が伺えた。

「地域一番店」を目指して 地元で愛される店作り

「地域に必要なとされる店は、地域を知ることから始まる」と持論を展開する稲月さん。店長として初めに手掛ける事は、地域情報の収集だという。

現在働いている仙台茂庭店は、昨年12月にオープンしたばかりの仙台初進出店だ。

福島で周知されている同社も、仙台では知名度がなかったため、「周辺地域の町内会長や公民館へ足を運び、名刺をお渡しすることも大切な仕事だった」と話す。

地域をくまなく歩き、そこで顔見知りになった地元のみなさんから、たくさんさんの情報を教えていただいた。

稲月さんの オフショット

エネルギーの補給は 福島で家族とい時間

休日には福島で家族と過ごすことが多いという稲月さん。温泉に出かけたり、公園でお子さんと遊んだり、釣り堀で家族そろって楽しむこともあるという。現在の赴任地・仙台と福島間は、高速道路を使用すれば片道およそ30〜40分。

「私にとって故郷の福島は、どこに比べても、最も心地良い環境があります。自然も身近にたくさんあり、楽しむ場所に事欠きません」と話す。「家族ができ、これまで以上に責任を持ち仕事に当る自分がいま」と熱く語ってくれた。





不備が無い自転車などの商品チェックを入念に行う。

例えば、イノシシの被害に悩まされている話を聞き、「防獣用品の品ぞろえを手厚くしなければ」と、店舗作りに反映させることができた。

**新たなチャレンジに奮い立つ
やりがいはいは、お客様の笑顔**

店長としてのキャリアは3店舗目だったが、新しい店作りの取り組みは初めての経験。「辞令を受けて不安もありましたが、ワクワク感の方が強かったですね。オープン当日でございよう雰囲気とおお客様の期待感はこの上ない感動だった」と振り返る。

後輩へのアドバイス

社会人になり、家庭を持ち、福島だけでなくほかの地域で暮らす経験を重ねて思うことは、自分を育ててくれた故郷・福島への深い感謝の気持ちです。

その感謝の表し方の一つとして、地元福島で就職する道もあるのではないのでしょうか。一人の力は小さなものでも、それが地域社会の活性化に役立つことになり、自分が元気に一生懸命働く姿は、周囲の方々元気にはならず。

色々な夢を持ち羽ばたこうとするみなさんも、地域にお世話になった感謝の気持ちを忘れることなく、ますます励んでいただきたいと思います。



これまで、どんな時でも「お客様の立場と目線で、お話をすること」を心掛けてきた。部下のアイデアに耳を傾け、新たなチャレンジの機会を与えてみることも、従業員のモチベーションアップにつながったと感じている。

慣れ親しんだ地域の良さや地域の個性を、そこに暮らす人々は気付かないことが多い。稲月さんはほかの地域を知ること、故郷・福島にあ



らためて自分の原点を強く感じることになったと語る。「家族の待つ福島は、私にとってかけがえのない場所です」と語った。



※仙台茂庭店

企業情報

株式会社ダイユーエイト

所在地／福島県福島市太平寺字塚ノ上58
TEL: 024-545-2215
<http://www.daiyu8.co.jp/>

代表取締役社長／浅倉 俊一
資本金／1億円
設立／1976年4月
従業員数／450人（正社員・2018年1月現在）
事業内容／ホームセンター事業及びその他の専門店事業



地元の良さを知ろう

Interview

福島大学
ふくしま未来食・農教育プログラム
プロジェクト研究員

服部正幸さん

[福島県二本松市出身]

地元で暮らし、
働く魅力とは何か。
震災後、福島県に
Uターンした
服部正幸さんに
お話をうかがいました。





2011年8月に行われた蓬平猿倉岳ブナ林ウォーキングイベントの様子。新潟県長岡市太田地区にある蓬平集落の住民が地元を観光を散策。地元中学生による演奏を楽しんだ。

地元の復興の力になりたい 新潟県でノウハウ学びUターン

—福島県に戻るまでの経緯について教えてください。

私は高校卒業後、大学進学のため住んでいた長岡市（新潟県）で、在学中に2度の大きな地震（新潟県中越地震・新潟県中越沖地震）を経験しました。そして被災地を訪れ、復興に向けたまちづくりやコミュニティ再生について学びました。

大学卒業後は、新潟市や東京で会社員として働いていました。「このまま東京で頑張ろうか、それとも地元福島に戻ろうか」と迷っていた2011年3月。東日本大震災が発生したんです。

すぐに福島に戻って、ふるさとの力になりたいと思いましたが、「まずは復興に関わる仕事のノウハウを身に付けてからにしよう」と考え、長岡市で中越地震被災地のまちづくりに携わっていた大学の先輩や同級生を頼って再び新潟県に戻りました。

長岡にある人口250人ほどの小さな集落で、地域の交流人口を増やして活性化を図るため、住民を対象としたイベントやワークショップを開きました。しだ

いに地域のみなさんから提案があり、地域ぐるみでスポーツを楽しんだり、大会出場に向け練習したりしました。

そして、2012年4月からは農村などのコミュニティ再生に取り組むNPO法人の被災地支援事業に携わることになり、拠点が置かれた福島大学で働くため福島県に戻ることになりました。

農業再生で被災地を元気に 復興を志す人たちと共に歩む

—福島県に戻ってからはどんな仕事に携わったのでしょうか。

被災地で新たな雇用を生み出すため、県内のさまざまな地域を訪問して、起業や新商品の開発に挑戦したいと考えている人を発掘。ビジネスの道筋と一緒に考える支援活動をしてきました。また、大学生を対象とした県内でのインターンシップの受け入れにも携わりました。

そして、2016年4月からは、福島大学でふくしま未来食・農教育プログラムのプロジェクト研究員として働いています。

プロジェクトでは、農業の再生や農産品のブランド化による中山間地域を活性化に取り組んできました。



2013年に行われた起業家サロンの活動。地域資源を使った新しい事業の立ち上げを目指すみなさんが集まり、意見交換を行った。

服部 正幸（はっとり・まさゆき）

1986年、福島県二本松市出身。長岡造形大学（新潟県）在学中に新潟県中越地震（2004年・M6.8）と新潟県中越沖地震（2007年・M6.8）を経験する。卒業後は新潟市内や東京都内の民間企業に勤務。2011年、財団法人（現・公益財団法人）山の暮らし再生機構（新潟県）、2012年、認定NPO法人ふるさと回帰支援センター（福島県担当）を経て、2013年から現職。



農産物の直売所の依頼を受け新商品の開発に関わる。会員である生産者に向けて、開発商品やキャラクターデザインを説明した。

例えば、農産物直売所の店長の相談を受け始まった新商品の開発では、商品にストーリー性を持たせるため1年かけて地域周辺を歩き、震災後の農家の苦悩や土地の風土や歴史、食文化を調べました。また、商品をイメージしたキャラクターの考案に携わりました。

これまで農村のコミュニティー再生には関わってききましたが、農業そのものに深く携わる事業は初めての経験。最初は農業について全く知識がなく、的確なアドバイスができず苦労しましたが、大学の先生のサポートを受けながらプロジェクトを進めていきました。現在も仕事を通じて、地元福島県で貴重な出会いや体験をさせてもらっています。

温和な人柄に秘める熱い心 人柄こそが福島の魅力

—福島県に戻って感じた地元の魅力は何でしょうか。

やはり、「人柄」だと思います。これまで、たくさんの方の地元農家や企業の人たちと関わってきて感じたことですが、福島の方は、温和で優しい人が多いですね。

一方で、交流を深めていくうちに内に

熱い思いを持っていることにも気付きました。震災後ということもあり「地元復興のために」という強い信念を持った人たくさん出会うことができました。

また、東北地方で東京が一番近く、農産物などを大消費地である首都圏に供給してきたというバックグラウンドがあるからなのでしょう。福島の人たちは仕事に対して真面目で、「求められたことにきちんと応えてくれる」ように思います。

—東京（や新潟）の生活から一番変わったのはどんなことでしょうか。

簡単に言うと、「暮らして仕事の距離が縮まった」ことです。

東京にいたときは、「仕事は仕事。休みは休み」と切り替えていました。でも、福島に来てからは休みのときでも仕事をしているような感覚です。ただ、そのことでストレスを感じることは全くなく、365日仕事のことを考える事ができますね。

地元の農家や企業で働いている人たちを見ていても自分の裁量やペースで仕事ができるからなのでしょう。みなさん生き生きとしています。



農産物生産法人の立ち上げ支援の一コマ。法人代表と一緒に拠点となる場所を調査し、今後のプランについて話し合った。

地元で働く価値が見直され これからはもっと 活躍できる場が開かれるはず。

同じ志を持つ仲間や活躍のチャンス
地元でたくさんさんの宝物が見つかる

—地元で働く魅力について聞かせてくだ
さい。

地元には知り合いが多く、スムーズに
仕事を運びやすい、同じ志を持っている
仲間と出会いやすいこと。これが地元で
働く魅力だと思います。

私の場合、取材に来た新聞記者が高校
の同級生だったり、たまたま実家の納豆
屋で取引がある企業と仕事をする事に
なったりしました。

これまでも強みだった農業のブランド
化、医療など新しい産業への期待。福島
には未開拓な部分が多くて起業のチャン
スがたくさん眠っていると思っています。
昔は東京に出ていかないとできな
かったことも、地元発信で全国的な活躍
できることはたくさんあります。

—最後に地元の若者へメッセージをお願
いします。

これからは働き方がもっと多様にな
り、地元で働く価値や意味も見直されて
いくと思っています。ですから、自分の
考えや行動したいで地方に住んでいて
活躍の道が開かれていくはずですよ。

私は若い頃は、自分らしく生きるため
にもっと突っ走ってもいいのかなって
思っています。そのアクションが、自分
のルーツである地元でやれるのならいい
ですよ。年齢や経験を重ねるたびに新
しい再発見もあるし、さらに自分を磨く
こともできるでしょう。

私は、地元で頑張るみなさんを応援し
ながら充実した毎日を送っています。い
つの日かみなさんと出合い、力になれた
らうれしいです！



「浜通り・中通り・会津で気候風土や文化風習が
違いバラエティー豊かなところも魅力の一つ」
と話す服部正幸さん。「今後もさまざまな地域を
訪れ、地域資源、特に歴史・文化の有効活用方
法を探っていきたくて妄想しています」。

都会と地方の違い

東北大学大学院 経済学研究科 教授

吉田 浩



都会と地方の違いについて、一概に優劣をつけられるものではありませんが、さまざまな調査結果の数字から地域ごとの特性を見ることは可能です。

例えば、平成27年に行われた国勢調査（総務省の結果を見ると、生活に欠かせない衣・食・住の「住まい」についてみただけでも、持ち家比率については、東北では全国2位の秋田県78・0%を筆頭に、岩手県が68・7%、福島県が66・1%、宮城県が58・8%と、東北地方は全般的に持ち家比率が高くなっています。ちなみに東京都が47・7%と半数以下であることを考えると、かなり高い比率といえるかもしれません。

また、「働く」ということを考えた場合、雇用者総数に対する正規職員・従業員の比率、いわゆる正規雇用者比率も、山形県の70・8%を筆頭に、福島県が68・7%、岩手県が67・3%、宮城県が66・3%と、東北地方では正規雇用者比率が高くなっています。

このように、一つひとつの項目を見ていくと、ほかの都道府県と比べて、岩手県と福島県は「食料自給率」が高かったり、宮城県は「事業所新設率」が高かったりと、それぞれ特徴があるのです。

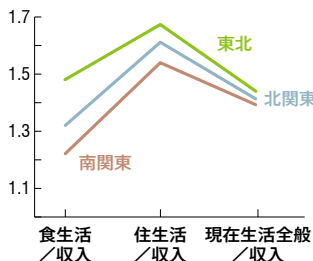
そこで一つの目安となるのが、現在の暮らしに対する満足度です。

平成29年に内閣府が行った「国民生活に関する世論調査」の、現在の生活に対する満足度調査から、「所得収入」、「食生活」、「住生活」、「現在の生活」の満足度を、東北地方、北関東、南関東の地域で比較してみました。その結果、東北地方は「所得収入」に対する満足度は低いものの、「食生活」、「住生活」において満足度が高くなっています。（表1）

東北地方は関東圏よりも食生活に対する満足度が高く、先述の持ち家率も高く、住生活にも満足している人が多いようです。

一方、現在の生活についての満足度は南関東が高くなっていますが、「所得収入」の満足度を基準として「食生活」、「住生活」、「現在の生活」の満足度を比較すると、実は東北地方は現在の生活に対する満足度も高くなるのです。（グラフ1）

現在は新幹線や高速道路が整備され、例えば仙台から東京までは新幹線で約1時間半と日帰り圏内です。首都圏へのアクセスの利便性も高く、豊かな自然に囲まれて、新鮮な食材が関東圏より安く購入でき、関東圏よりは広い家に住めるということを考えて、東北で働き、東北で暮らすという選択肢も「まんざらではない」のではないのでしょうか。



	a	b	c	d	e	b/a	c/a	e/a
	所得収入	食生活	住生活	レジャー 余暇生活	現在生活	食生活 / 収入	住生活 / 収入	現在生活 全般 / 収入
北海道	46.1	24.0	84.1	59.4	70.8	1.302	1.824	1.536
東北	49.7	29.5	82.6	58.0	70.9	1.484	1.662	1.427
北関東	49.7	26.3	81.1	61.3	70.3	1.323	1.632	1.414
南関東	53.5	26.0	82.5	65.9	75.0	1.215	1.542	1.402

（表1）国民生活に関する世論調査（内閣府調査）「満足・まあ満足」と答えた人の比率

調査対象： 全国の日本国籍を有する18歳以上の者10,000人
有効回収数6,319人（回収率63.2%）
調査期間： 平成29年6月15日～7月2日

（グラフ1）

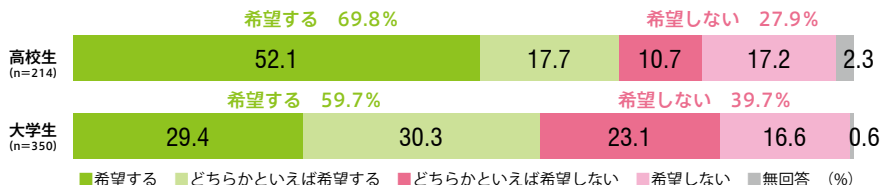
被災3県の高校生・大学生の就職に関するアンケート

平成29年12月に岩手・宮城・福島の高中生（水産系を中心）・大学生に対して、就職に関するアンケートを行いました。3県の学生の地元就職に対する考え方を見てみましょう。

※被災3県高校生214名・大学生350名の回答から（2017.12 被災地における高校生・大学生・保護者の就職に関する調査）

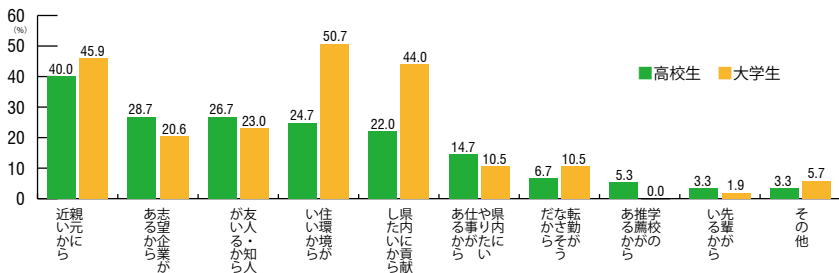
■ 県内への就職希望について

県内への就職希望者は、「希望する」「どちらかといえば希望する」と回答した「希望する」学生が、高校生では約7割、大学生では約6割と、いずれも半数以上が県内就職を希望しています。



■ 県内就職を希望する理由

県内への就職希望理由は、高校生が「親元に近いから」が最も多く、大学生では「住環境がいいから」「親元に近いから」「県内に貢献したいから」などとなっています。



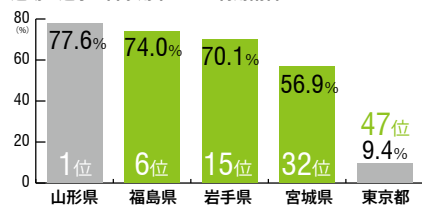
数字で見る3県の特徴

首都圏と東北各地の違いは、暮らしにかかわるさまざまな数字からも見る事ができます。国が行ったさまざまな調査結果から都会と地方の違いを見てみましょう。

通勤手段

通勤方法は、東京都では鉄道・電車の利用が最も多く、東北地方は山形県の1位を筆頭に、自家用車で通勤・通学している人が多いのが特徴です。

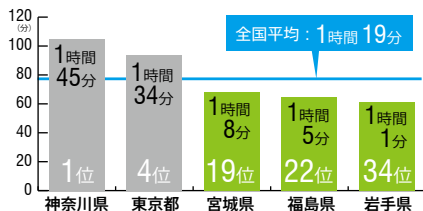
通勤・通学で自家用車だけの利用割合



※平成22年国勢調査より

通勤時間

1位の神奈川県に続いてるのが埼玉県、千葉県と、1日あたりの通勤時間が長いのが首都圏の特徴です。

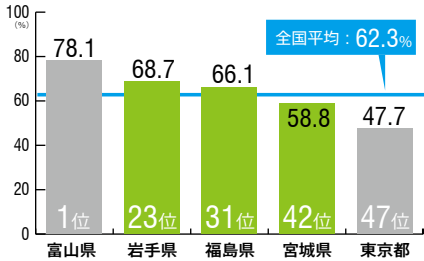


※1日あたりの通勤・通学時間(10歳以上の「通勤・通学」をしている人、平日の平均) 平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

住まいについて

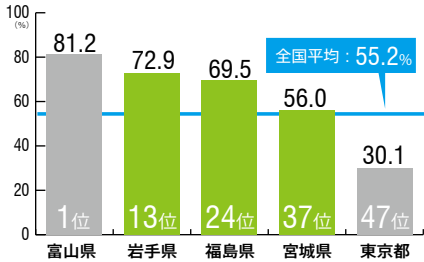
東北地方は、持ち家の比率が高く、岩手県、福島県では全国平均を上回っています。そのうち、一戸建ての住まいに住んでいる人が多いのも特徴です。

持ち家比率



※平成27年国勢調査

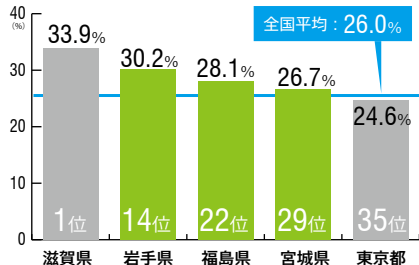
持ち家のうち一戸建ての割合



※平成27年国勢調査

ボランティア

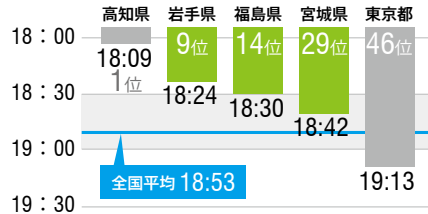
東日本大震災を経験しているだけに、ボランティア活動に熱心なのも東北地方の特徴で、岩手県・宮城県・福島県ともに全国平均を上回っています。



※過去1年間にボランティア活動をした人の割合(10歳以上)
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

帰宅時間

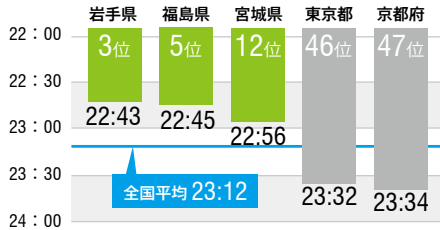
東京都では、通勤時間や就業後に立ち寄るスポットが多いせいか、帰宅時間は19:13と、遅くなっています。



※有業者の平日における平均帰宅時刻
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

就寝時間

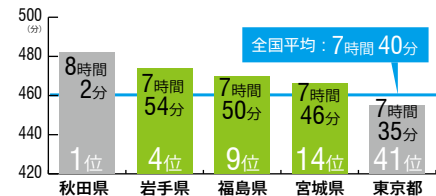
東京都の平均就寝時刻は全国平均よりも遅く、岩手県、福島県では、全国平均よりも早寝の人が多ようです。



※10歳以上の男女の平日における平均就寝時刻
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

睡眠時間

一日の睡眠時間の長さは、秋田県の1位を筆頭に、岩手県・宮城県・福島県ともに全国平均を上回っています。大都市圏に比べてゆっくり寝ているようです。



※1日あたりの睡眠時間(10歳以上、土日を含む週全体の平均)
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

地元企業に目を向けよう

企業のさまざまな情報は、大手就職サイトなどで見ることができる。一方、企業を選ぶ学生も、そうした就職サイトに名を連ねる大手企業や首都圏企業に注目しがち。

しかし、そのようなサイトに掲載されていなくとも、仕事の魅力はもちろん、職場環境の改善や地域密着、社会貢献など、さまざまな取り組みを行っている多くの魅力的な企業が、地元にもたくさんある。一方でそうした地元の企業は、あまり学生に知られることなく、人材の確保に悩んでいる。

豊かな自然に囲まれて、これまでの住み慣れた環境で、家族と共に暮らしながら地元の魅力的な企業で働くことも選択肢の一つ。

まずは、地元企業に目を向けてみよう。

問い合わせ先

復興庁企業連携推進室

TEL 03-6328-0267

mail kigyo-rs@cas.go.jp



ジモト
で 福島県版
はたらく



Reconstruction Agency

新たなステージ 復興・創生へ